

序 文

本財団では、財団設立の趣旨である国民海事思想の普及・徹底および海事諸現象の理解に必要な理論的研究に顕著な業績のあった人を顕彰するために、財団の設立者名を冠した「山縣勝見賞」を創設した。

急な募集にも関わらず、著作賞にはたくさんの応募をいただいた。それに比べると、若手研究者を対象にした論文奨励賞への応募は少なかった。この原因が、急な募集のためなら仕方ないが海運を研究する学者が少なく、かつ論文を書く若手学者が少なくなっているとしたら心配である。

佐波宣平教授は「海運研究者の悲哀」の中で、「海運経済の領域には古典と名のつくものがなく研究者にとって極めて不利である。だから海運経済の研究を積極的に若い人たちにすすめる気になれない。」と言っておられる。しかしこれは1951年ごろのことで、その後佐波教授をはじめ多くの学者の努力により古典と言えるものが今日では充実している。となると、海運には若い人の情熱を掻き立てるものがないのだろうか。

個人的なことだが、私が海運会社へ入社した1961年、海運会社は、まだ第二次世界大戦のダメージから立ち直っておらず、その収益・株価・社員への待遇どれをとっても見劣りがあった。そして不況・合理化・合併は退職するまで続いた。しかしその間仕事は大変面白かった。これは多分海運という領域にはたくさんのテーマがあり深い知識を要求されるからだと思う。

一方、研究者が少ないということは、海運を学ぶ学生も少ないことでもある。今海運会社では新卒者を採用する際、海運について学んだかどうかはあまり重要ではないと考えられているようだが、海運を学び船が好きだから海運会社に入りたいという情熱を私は評価したい。

最近、海運会社の経験を生かして大学で教鞭をとる人が増えている。望ましいことである。会社での経験で得た知識や海運の面白さを学生に伝えてほしい。

今年の年報では実務経験者石黒行雄先生、森隆行先生そして現役の合田浩之先生の論文を掲載した。実務経験者でなければ書けない豊富な知識に裏打ちされた立派な論文である。

また、今年度から柴田先生による戦後港湾政策に関する論文の掲載が始まる。長年の経験による分析は楽しみである。

青木氏による山縣勝見が会長を務めた海洋少年団の活動について、また、海運が直面している問題として海賊・テロ問題に関する山田先生の論文、今後のロジスティクス展開に関する林先生の論文、そして今まで誰も書かなかった鈴木先生の「海貨業の現状と課題」と充実した論文を満載した第57集「海事交通研究」を発行できたことに関し、執筆者の皆様感謝申しあげるしだいである。

2008年10月

財団法人 山縣記念財団
理事長 宮都 讓